

乳幼児の保育環境について

—綿、羊毛を中心とした活動の展開（その1）—

重森 澄江

竹井 史

○高橋紀代香

牧田 栄子

（南海福祉専門学校）

（美作女子大学）

（南海福祉専門学校）

（兵庫県立成人病センター保育室）

はじめに

日本保育学会第37、38、39回大会研究論文集において、乳幼児のための布絵本、プレマットの作成、手織機によるハッグの考察及び作成など、乳幼児がこれらで楽しく遊ぶ過程で心身の諸機能の発達を促進させたことを報告した。本研究はそれらの素材、綿、ウール等の最も根源的な生産活動である綿の栽培や羊毛を中心とした活動に重点をおく。

1、目的

今日、乳幼児を取り巻く社会的環境は物質的には豊かであり、そのほとんどはたやすく入手できる。反面、その生産活動を直接体験できる環境は失われつつある。

乳児の日常生活において、衣、食、住は切り離すことのできない現実である。本研究では特に衣生活を中心として、食、住生活との関連をもたせながら、衣生活にかかわる根源的な綿の栽培（羊毛を含む）からその収穫を通じて綿や羊毛で充分遊ぶことを第一の目的とする。その事後において綿織り、糸紡ぎ、染色、機織り、更に完成した布で幼児がハッグを絵として表現し、それを参考にして幼児とともに作製する。これらは例外なく、私達の糸、私達の布、世界で一本一枚の貴重なものである。これらのいわゆる生産活動の過程では動植物をいたわり、生命の尊さ、物を大切に、責任感の養成、自然に対する敬愛、工夫、友達と協力し創造し作りあげた喜びを味わうことが可能であろう。本研究ではそのような視点にたつて、一人一人が生き生きと自己を充実させ、心身の諸機能を促進させ、豊かな人間形成の基礎を育てるための保育環境について考えたい。

2、方法

期 間：平成2年4月～3年3月

対象園：兵庫県小野市下東条中央保育園

対象児：1歳児3名、2歳児12名、3歳児24名
4歳児29名、5歳児22名、合計90名

協力園：兵庫県立成人病センター保育室、兵庫県下〇保育所、T保育所（1～5歳児208名）

活動のあらまし

①綿の栽培（藍も含む）。②綿、羊毛で遊ぶ。③綿織りをする。④糸を紡ぐ。⑤染色をする。⑥機織りをする。⑦遊具を作製する。⑧作製した遊具で遊ぶ。

3、活動のねらいとその展開

（1）活動のねらい

①綿（藍）の栽培から収穫を通して

・動植物（綿、藍、羊毛）と衣食住とのかかわりを知る。・植物の尊さを知り、進んで世話をし収穫を喜ぶ。

②綿、羊毛で遊ぶ（1～5歳児）

・いろいろな遊びを工夫して楽しむ。・綿、羊毛を触る、丸める、引っぱるなど偶然にできた糸の形を楽しむ、日常生活とかかわりがある事に気づく。・衣生活に関心をもつ。・素材の色、形、数、量などに興味や関心をもち喜んで遊ぶ。・羊の生態を知る。

③綿織り④糸紡ぎ⑤染色⑥機織り

・フェルトを楽しんで作る（ごっこ遊びの遊具にする）。・種を取る楽しさや、友達と一緒に紡いだかけがえない世界で一本の糸、友達と協力して織りあげた世界で一枚の美しい布に感動し共感する。・藍の葉をたくさん活動を喜び、工夫したり協力してつくる。

⑦遊具を作製する

・異年齢の友達が喜んで遊ぶ遊具を考える。・自分が欲しい遊具を絵として表現する。・ハッグを工夫して縫ったり、紐などを喜んで作る。

⑧作製した遊具で遊ぶ

・友達と力を合わせて作った遊具で遊びを工夫し、充実感を味わう。

（2）活動の展開

①綿（藍、羊毛を含む）の栽培から収穫を通して

4月下旬、昨年秋に収穫した綿で「ふわふわして気持ちいいね」「うわあー糸みたいになった」と綿を長く引っ張って数人で遊ぶ。綿、羊毛が衣生活と関係あることに気づかせる。綿の種を「ちょっと青色みたい」「形も長くて細い」等と気づいていく。「早く種をまきたいな」と自分達との関係が明確になったので、主体的になった。1人が2粒ずつ持って、植木鉢や畑にそっと蒔く。主体的に水をやる。水やりは毎日交代でする事を話し合う。一週間後「芽がでた、かわいい」とその成長を楽しみにしている。

7月下旬、「あれっ、朝黄色だったのにピンクになった」と夕方花がしぼむ時の変化に気づいた（藍の成長過程も含む）。9月上旬頃から綿毛がはじけてくる。ある日、未熟の枝が折れたのを機会に、その青い綿さやと

成熟した綿花の重さを比較した。前者は後者より重いと全員が確認する。その理由について関心をもたせると、「中を爪で割ったらいい」とT子が簡単に割った。「白くて冷たくて固い」「ぬるぬるしていて白いのがくっついていて種も肌色みたい」と直接に指で触ってみることにより、未熟の綿さやの中の状態に気づいた。T子が「あっ、わかった！青いのは水を持っているから重たい」と敏感に直感的にそれをとらえる事が可能だった。更に植物が成長していく過程に気づき、種の色が未熟である事にも気づき、その神秘的な場(環境)で生命の尊さを知る事ができた。

②綿、羊毛で遊ぶ(11月上旬)

1、2歳児

1歳児(綿)ではさわる(ア)両手で丸める(イ)ひっぱる(ウ)投げる(エ)ほおずりをする(オ)足にくっつけて喜ぶ。羊毛では白黒の羊毛を見てそっと手を出す。保育者がほおずりをする、そっと触り(ア)～(オ)の行動に加え、耳、頭、手足にくっつけて、全身で感触を喜ぶ。1歳児は綿より羊毛に興味を示した。羊毛は綿より暖かい感触があり、柔軟性があるためだろうか。2歳児(綿)では、「つるつるして気持ちがいい」と言って、(ア)～(オ)の活動に加え、ままごと遊びのごちそうにする。羊毛では最初、不思議そうに見る。羊の絵本を読んでも「黒い羊さん」と関心を示す。事後、(ア)～(エ)の行動に加えて両手で嬉しそうにほおずりをする。

3、4、5歳児

3歳児(綿)では、2、3人で「気持ちいいね」とほおずりをしたり、店屋ごっこ模倣遊びを楽しむ。3歳児(羊毛)では白黒のミックスになった羊毛を見せ、それが羊の毛である事を告げると「知ってる、見たことある」と関心を示した。(ア)～(オ)の遊びを繰り返して楽しんだ。ある子が20cm位の長さにひっぱり「糸みたい」と言うと、他児も同じように糸に興味を示した。保育者のセーターが羊毛からできている事を簡単に話すと「ふわふわして気持ちがいい」「あれっ、くるくるまいていところもある」と具体的な観察をする。「今度、羊さんに会ったら何と言おうかな」に対して「羊さんありがとう」「羊さんごころうさん、たくさん草たべてね」と羊との関係が明確になるにつれて、羊に対して強い関心を示し、表情も明るくなってきた。一人が「羊さん作ろう」と「お父さん羊」「お母さん羊」「赤ちゃん羊」を作り(油粘土使用)、「たくさん草食べて」とお礼をするように優しく草を食べさせて遊んだ。その後、羊の絵を描き、毛を糊ではりつけて遊ぶ。

4、5歳児(綿)では、「ふわふわしてる」「葉っぱが

ついてる」「中に何かあるみたい」といって種を取りだしはじめた。「私の16個」「23個」と並べて数える。二人で綿を両手にもって頬をなでながら「気持ちがいいね」と喜びあう。「綿に絵の具を塗ったらどうなるかな」と筆に絵の具をつけるが、「つかない、べとべとになった」と染まらない事に気づく。ミ獅子舞いを作る(口髭や頭髪にする)、クリスマスツリーの装飾や他に綿をひいてあるのを眺め「本当の雪みたいにきれい」とその神秘的な環境に感動していた。

4、5歳児(羊毛)では、きれいに洗った羊毛の塊(15×20cm)と汚れたままの原毛を見せると前者を見て「あっ、羊の毛」「ぼく牧場でみた」と関心を示す。後者は「うわあ、変な匂いがする」と顔をしかめたり、逆に珍しそうに見る。それを洗うときれいになる事に気づき、保育者と一緒に洗った。きれいになった羊毛を前に、匂いだし、丸めたり、ひっぱったりした。その後、2人でネックレスのようなものを作ったり、ハッグの形を作ったり遊んだ。一人が長くのぼしているのを見て(約2m)、3、4人が模倣し、「面白い糸や」と次々に毛糸状にしていく。ここでは遊ぶ過程で工夫、挑戦し、偶然糸を発見していく。そして、その根源性に気づいて衣生活に強い関心を持つようになる。

4、考察

綿(藍、羊毛を含む)を中心とした活動の過程で日常生活の衣生活と関係が密接である事に幼児自身が気づき、主体的に栽培活動を行った。特に、未熟な綿さやと成熟した綿花との重さの比較では5歳児が直接触覚を通じて、その中の状態が未熟である事に鋭敏に直感的にそれをとらえる事が可能であり、植物の生命の尊さに気づいた。

綿、羊毛の素材で遊ぶ過程では触る、丸める、ひっぱる、投げる、ほおずりをするなど主体的な遊びが見られ、特に乳児は羊毛と出合う事によって全身で感触を喜び情緒を安定させた。それらで遊ぶ過程で偶然に糸を発見する。衣生活の根源である事に気づき、それに強い関心を示し、動物(羊)に対する感謝の気持ちを言葉や表現活動(油粘土)として表出する。更に、これらで遊ぶ過程で友達との関係が密になり、羊毛(原毛)に直接触れ、羊の生態に気づき、糸を生産する過程を直接体験する事ができ、衣生活との関係を具体的な活動を通して学んだ。これらの活動の過程で自己を充足させ得た自然環境、人的環境(保育者の援助、助言など)の果たす教育的役割は大きいといえる。